

小林尚礼著 『梅里雪山—十七人の友を探して』

この本も近刊であるから、「記憶の本」の部類ではないが、記憶に残るドキュメンタリーであるので掲げておく。

今から15年ほど前のことであるから、日本の海外登山史上では極く最近の出来事と言えるが、中国の雲南省と西藏自治区の境界に位置する「梅里雪山」（メイリーシュエシヤン、6740m）の初登頂を目指して日中合同登山隊が組織された。この辺りは怒江（サルウィン川）と瀾滄江（メコン川）と金沙江（チンシャー川）の源流が併流するインドシナ半島付け根の奥地で、横断山脈（ホントワン山脈）と呼ばれる5～6000m級の未踏の山々が連なる秘境である。位置的には昆明の北西にあたる。海外の山好きにはミニヤンコンガの南、チョモランマの東といえば分かりが早いかもしれない。元々は少数のチベット民族がひっそりと暮らしていた山陝の寒村であったが、チベットが中国に併合されてからは多少は雲南省辺りとも人の往来ができたらしい。しかし、まだまだ外国人は入らない秘境の地であることには変わりなく、同じくチベットのタングラ山脈東部の「チベットのアルプス」と呼ばれている山城とともに多くの未登峰が残されている数少ない辺境の地である。梅里雪山も現在に至るまで未踏である。

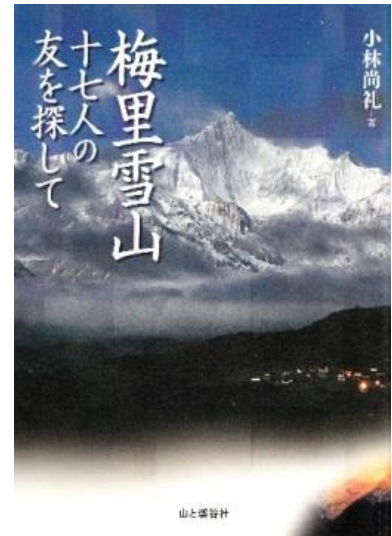
前置きが長くなったが、この山を目指した日中合同登山隊17人（日本側は京大学士山岳会13人）は1991年1月3日BC（3500m）との定時交信を最後に連絡が途絶え、C3（5100m）に集結していた全隊員の消息が分からなくなった。例年に無い大雪で想像を超えた大規模雪崩が発生し、これに飲み込まれたと推測されており、日本最大の海外遭難事故と言われている。ここでは遭難の顛末を書くのが趣旨ではないので、遭難や捜索の経緯は本書に譲って、以下本論に移りたい。

この本の著者はこの遭難事故当時京都大学山岳部の現役学生で、事故直後の第1回目の捜索隊に参加して以来15年間に亘り、独りで雲南省明永村の現地に通い続けて遺体や総重量1トン以上に及ぶ遺品を収容した。13年目の2004年、16人目の遺体を収容できたが残る1人は未だ発見されていない。遺体や遺品は梅里雪山から流れ出す明永氷河に流出し、年を経て氷河末端に現れたものである。エベレストなどの氷河では遺体が氷河末端に流れ出るのに100年とも50年とも言われているが、梅里雪山の氷河は豪雪と急峻な地形のために氷河の流出速度が速く、早くも7年目で最初の遺体や遺品が氷河末端で発見されたのである。

梅里雪山は地元の民にとっての聖域で、この遭難は地元民の聖山信仰を土足で踏みじった結果の天罰であると非難され、捜索活動の受け入れも拒否、その後起きた不作や厄災もすべて登山行為のせいであり、また遺体で水源の水を汚したとして多大な慰謝料を要求された。

著者は一人で現地に入り捜索活動を行っていたが、最初の頃は著者に対する現地の目は冷やかかで悪意に満ちたものだったようだ。陸の孤島のような山深い辺境で何百年もの間、静かに自給自足の暮らしをしてきた人達にとっては当然のことだろう。ましてこの地域は元来チベットの独立国だったものが中国に奪われてしまった経緯があり、特に外国人に対しては警戒の念が強かったことは容易に想像できる。しかし、何年間も通っているうちに地元の人と心が通じ合うようになり、やがて著者は現地に溶け込んでゆく。捜索活動の合間に、チベット人の一生の悲願といわれている梅里雪山を一周する巡礼の旅にも現地の人と一緒に3回も出掛けしている。

初めの頃は梅里雪山にどうしても登頂したいという気持ちが強く、巡礼路から見える梅里雪山を眺めては登路の研究ばかりしていたが、この山の懷に住んで毎朝毎夕この山を眺めているうちに、やはりこ



れは地元の人が言うように登ってはいけない聖山で、この途方も無い自然の造形は人智の及ぶところではないと思うようになる。地元の人々は、この山を囲んだ4つの最奥の場所を聖地として崇めているそうだが、ここはお互いにその領分を侵さない人と神との結界であると著者は考える。

梅里雪山に限らず、高峰はどこでも険峻で危険であり、人が入り込めない。雪崩や洪水は時として多くの人命を奪う。しかし一方で、氷河末端のモレーンには氷河が齎した豊富な水と栄養土が狭いながらも豊かな森を作り、ここに少数の人々がひっそりと貧しいながらも心豊かに暮らしてきた。即ち、高峰は人にとって凶悪な厄災神であると同時に、豊かな恵みを齎す豊饒神でもあったろう。

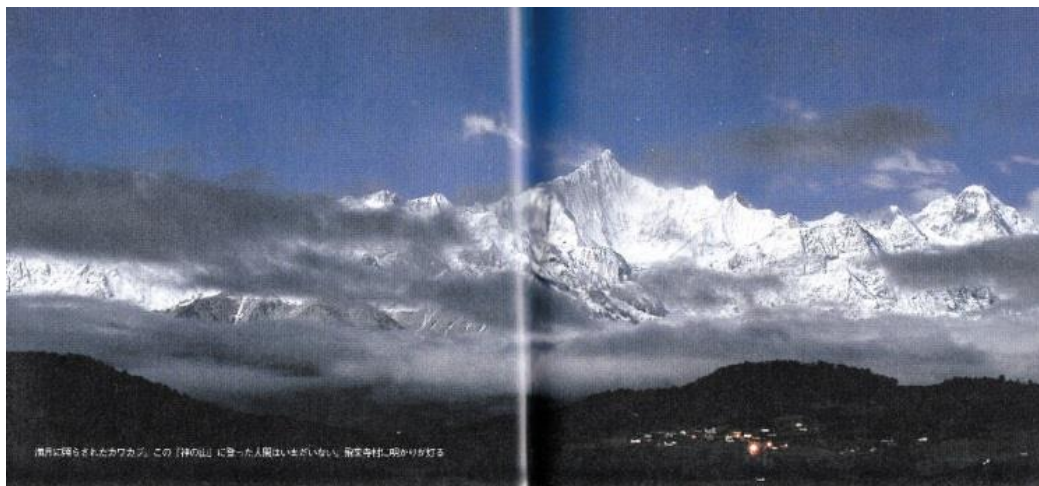
著者は試行錯誤しながら「聖山」としての「梅里雪山」へたどり着いた思いを「聖山とは、生命の源である。(中略) 生と死をつかさどるこの神の山は、人々の心の支えとなっている。この風景は教えている。人間の生きる背後に、大いなる自然が存在することを」と記して、この本の終章を結んでいる。

地元の人々から「聖山冒涇」の謗りを受けた登山隊は多い。古くは50年前の日本初のヒマラヤ遠征(マナスル)もそうだった。現在では未踏の高山は少なくなり、また、辺境も外部との往来も増えてきたから、このような悶着は少なくなっているかも知れない。しかし、逆に団体ツアーのトレッキングが増えており、聖山に対してではなく現地の人々の暮らしと信仰の中に土足で踏み込むような行為が増えているのではなかろうか。どこの国の奥山も交通が便利になって観光地化され、従って地元も客が落とす日銭を喜ぶ風潮になってきたから、表向きはウェルカムの顔をしているかも知れないが、心と暮らしの深層は昔と変わっていないのではないか。我々も心すべきことである。

明永村の村長の言として、著者は以下のように書いているが、けだしこれは地元で長年に亘り暮らし続けてきた人々の信条であろう。「聖山とは親のような存在だ。そこに登る行為は、親の頭を踏みつけることと同じだ。なぜ我々の聖山に登ろうとするのか。チベットには聖山ではない山もある。人里から仰ぎ見えない山がそうだ。そういう山に登ることまで我々は止めない」。「親」とは、人間を誕生させ、育み、再びそこに還らせるという命の源のような存在を指している。

余談であるが、小生はトレッキングというものにはさほど興味が無いが、この本を読んでいて梅里雪山の一周巡礼をチベット人と同様に五体投地しながら衣食住全てを担いで野宿で歩き通したい気がしてきた。一周3週間足らずであるから、何とかやれるであろうことを願っている。(チベット西方にはカイラスという聖山があり、ここの巡礼は世界的にポピュラーで、こちらの方が易いかも知れない。)

最後に書評めくが、著者はたった独りで現地に滞在していて、現地との人間関係、遭難者の遺族などとの確執など、想像を絶する苦労があったと思われる。それをサラッとした筆致で書いているのは流石と感心するが、長年現地で捜索活動を続けてきた著者にしか書けない赤裸々な葛藤なども書いて貰えれば、更に心にズッシリときたのではなかろうか。 山と溪谷社 2006 年刊。 (2006 年 6 月 記)



(梅里雪山の最高峰・カワカブ峰 本書から引用 部分)